

「ピラトの尋問」

マルコの福音書 15:1～15

はじめに

イエシュアは大祭司カヤパの官邸で尋問を受けた後、ピラトのもとへと連行されます。彼は当時この地方一帯（ユダヤ、サマリヤ、イドマヤ）の統治をローマ皇帝から任されていた 5 代目の行政長官であり、総督とも呼ばれていました。A.D26～36 年までこの地位にありました。本来ピラトは地中海沿岸のカイサリヤを本拠地としていましたが、過ぎ越しの祭りのような大きな祭りの時には、警備のためエルサレムに来ていました。ユダヤ人の指導者たちはイエシュアを死刑にするために彼のもとへと向かいます。なぜならこの当時、総督の許可なしにユダヤ人たちだけで勝手に死刑を行うことはできなかったからです（ヨハネの福音書 18:31）。このピラトの尋問の後、イエシュアいよいよ十字架へとぞまれるわけですが、ここにも神のご計画の重要な側面が指し示されています。それでは今日もヘブル語の視点でこれを捉えてまいりましょう。



1. ピラト

マルコの福音書【新改訳 2017】

15:1 夜が明けるとすぐに、祭司長たちは、長老たちや律法学者たちと最高法院全体で協議を行ってから、イエスを縛って連れ出し、ピラトに引き渡した。

イエシュアとピラト、この二人の出会いは決して偶然ではありません。また単なる法的手段のようなものでもありません。ヘブル語の視点で見ると、ここにはある重要なメッセージが表されているのです。ピラト(פִּיִּלָּטוּס)はローマ人であり、その名は本来ラテン語の「槍で武装した者」という意味のピラトウスが由来と考えられていますが、このようにこれをあえてヘブル語で表記すると、そこには「救う」という意味のパーラト(פָּרָאָה)という言葉を見つけることができるのです。以下の歌はその最初の言及です。

サムエルⅡ【新改訳 2017】

22:1 【主】がダビデを、すべての敵の手、特にサウルの手から救い出された日に、彼はこの歌の言葉を【主】に歌った。

22:2 彼は言った。「【主】よ、わが巖、わが砦、わが救い主よ、

ここで「救い主」と訳されているのが聖書で最初のパーラトです。イエシュアこそ「救い主」であり、救いはイエシュアにある、十字架という出来事によって、今こそイエシュアによる救いの御業が現わされること、そしてそれはダビデに象徴されるイスラエル王国の救い、その民の救済のことである、というメッセージがこの二人の出会いには表されているのです。以前「引き渡す」という意味のマーサル(מָסַר)は

本来、「選ぶ」という意味であると述べました（民数記 31:5）。イエシュアはイスラエルの「**救い主**」としてまさに神に「選ばれた」、油注がれた者であることがここには表されているのです。そしてこの出来事は「夜が明けるとすぐに、祭司長たちは、長老たちや律法学者たちと最高法院全体で協議を行って」引き起こされました。これも単なる状況説明ではありません。これはこの世の暗闇の支配の終わり、新しい時代の始まり、すなわち神の国の到来を指し示した「型」です。その時には、かつてイエシュアを死刑にしたユダヤ人の指導者たちおよび全イスラエルが、満場一致、全会一致で、つまり民族的に、国家としてイエシュアを「**救い主**」メシアとして認める、受け入れるようになる、時が来ればそれは「**すぐに**」起こる、速やかに行われる、ということがこの記述には表されているのです。

2. ユダヤ人の王

マルコの福音書【新改訳 2017】

15:2 ピラトはイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」イエスは答えられた。「あなたがそう言っています。」

15:3 そこで祭司長たちは、多くのことでイエスを訴えた。

15:4 ピラトは再びイエスに尋ねた。「何も答えないのか。見なさい。彼らはあんなにまであなたを訴えているが。」

15:5 しかし、イエスはもはや何も答えようとされなかった。それにはピラトも驚いた。

ピラトはこの尋問の中で、三度イエシュアを「**ユダヤ人の王**」と呼んでいます。奇しくも今回の箇所は、前回のペテロが三度イエシュアを否定したという出来事の続きです。つまり前回のペテロと、このピラトの出来事はつながっており、前回のペテロの否定には、第一、第二、そして第三のエルサレムの神殿の崩壊が表されていると述べました。そしてその事実を受けてのこのピラトの三度の言葉には、イエシュアが「**ユダヤ人の王**」となるその時、すなわちユダヤ人たちがイエシュアを自分たちの王として受け入れるその時、破壊され、また汚されたエルサレムの神殿は建て直され、復興するということが暗示されているのです。

私たち教会はイエシュアはメシア、イエスはキリストであると告白します。しかしイエシュアが「**ユダヤ人の王**」であるという事実を、一体どれほどのクリスチャンが理解し、それを重要視しているでしょうか。この時の異邦人の代表ともいべきピラトに対して、イエシュアはこの事実の他は何も話されなかったということを、私たち教会はもっと重く受け止める必要があるのです。先ほどのダビデの歌にもあったように「**【主】よ、わが巖、わが砦、わが救い主**」また癒し主、慰め主など、私たちはイエシュアを様々な言葉で言い表し、これを信じ受け入れています。そして何よりイエシュアは神の御子であり、神そのものであられる御方です。しかし神のご計画は、そのような御方であられるイエシュアが「**ユダヤ人の王**」イスラエルの王となられることなのです。もう何度もお伝えしていることですが、神のご計画は、神を信じ、イエシュアを信じる者たちが死んで天国に行きつて終わり、ではありません。神のご計画とは、御子イエシュアがこの地上に再臨され、「**ユダヤ人の王**」となられ、イスラエルを再興し、それによって地上の全人類を祝福し、統治する、メシア王国、千年王国とも呼ばれる「御国、神の国」を建て上げることにあります。私たちに与えられる救いとは、そこに入り、そこに住まい、そこに生きることなのです。つまりイエシュアが「**ユダヤ人の王**」とならなければこれは成し得ません。イエシュアとピラトのこの対話にはそ

の事実が強調されているのだということ覚えてください。地上の教会がますますこの事実が目が開かれていきますようにと祈ります。

3. 暴徒バラバ

マルコの福音書【新改訳 2017】

15:6 とこで、ピラトは祭りのたびに、人々の願う囚人一人を釈放していた。

15:7 そこに、バラバという者がいて、暴動で人殺しをした暴徒たちとともに牢につながれていた。

15:8 群衆が上って来て、いつものようにしてもらうことを、ピラトに要求し始めた。

15:9 そこでピラトは彼らに答えた。「おまえたちはユダヤ人の王を釈放してほしいのか。」

15:10 ピラトは、祭司長たちがねたみからイエスを引き渡したことを、知っていたのである。

15:11 しかし、祭司長たちは、むしろ、バラバを釈放してもらうように群衆を扇動した。

ここで「バラバ (בַּרְאָבָא)」訳すと「父の子」という名の人物が登場します。マタイの福音書 (27:16) では「バラバ・イエス」となっており、奇しくもここにもう一人のイエスが存在するわけです。彼は「暴動で人殺しをした暴徒たち」の一人であったとあります。ここに暴動、また暴徒と訳されている言葉はヘブル語ではマード(מָרְדִּי)と言い、バベルの最初の王、世の終わりに現れる反キリストの「型」またそのものとも考えられるニムロデ(創世記 10:8~10)を指し示す言葉です。つまりここには終わりの日に「釈放」まさに解き放たれる偽物のイエス、すなわち獣と呼ばれる反キリストの存在が指し示されており、ユダヤ人たちはこれを「要求し始め」る、つまり受け入れるようになることが表されているのです。

4. 十字架

マルコの福音書【新改訳 2017】

15:12 そこで、ピラトは再び答えた。「では、おまえたちがユダヤ人の王と呼ぶあの人を、私にどうしてほしいのか。」

15:13 すると彼らはまたも叫んだ。「十字架につける。」

15:14 ピラトは彼らに言った。「あの人をどんな悪いことをしたのか。」しかし、彼らはますます激しく叫び続けた。「十字架につける。」

15:15 それで、ピラトは群衆を満足させようと思い、バラバを釈放し、イエスはむちで打ってから、十字架につけるために引き渡した。

十字架、ヘブル語でこれをハツレーヴ(הַצֵּלֶב)と言います。実は旧約聖書にこの言葉は存在しません。しかしだからと言って無視するべきではありません。ちなみにイエシュアの育った町「ナザレ」もそれそのものとしては旧約聖書にはありませんが、様々な御言葉の中に隠された形でその存在と意味を見出すことができます(詳しくは銘形先生のHP「牧師の書斎」をご覧ください)。ですからこのハツレーヴも同様に探してみたいと思います。

まずこの言葉は大きく分けて二つの言葉、正確には三つの言葉が組み合わさった合成語であると考えられます。十字架の絵を思い浮かべてください。二本の木が組み合わさった形をしていますね。これもヒントになると思います。そしてその二つの言葉とは、ハツアーラー(הַצֵּלֶה)とレーヴ(לֵב)です。

① ハツアラー

ハツアラーは旧約聖書において一度しか使われておりませんが、これもまた「救い」という意味の言葉であり、それは以下の記述です。

エステル記【新改訳 2017】

4:13 モルデカイはエステルに返事を送って言った。「あなたは、すべてのユダヤ人から離れて王宮にいるので助かるだろう、と考えてはいけない。

4:14 もし、あなたがこのようなときに沈黙を守るなら、別のところから助けと救いがユダヤ人のために起こるだろう。しかし、あなたも、あなたの父の家も滅びるだろう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」

これはエステル記の時代、メディア・ペルシャがユダヤ人たちを支配していた頃、アガグ人ハマンという男がユダヤ人を根絶やしにしようと画策した時のものです。「救いがユダヤ人のために起こる」ここにハツアラーが使われています。このように、ハツアラーとは単なる救いではなく、ユダヤ人を救う、イスラエルの民を守ることを意味する言葉であるとわかります。この時のアガグ人ハマンもまた反キリストの「型」です。最終的にこのハマンは、エステルの夫であり王であるクセルクセスによってその一族もろとも処刑され、逆に根絶やしにされます。そのように、終わりの時代には教会の花婿でありユダヤ人の王であるイエシュアによって反キリストは滅ぼされます。ハツアラーにはそのような神のご計画が表されているのです。

ちなみにこのハツアラーはナーツアル(נצוּר)「救う」という意味の動詞が語源なのですが、これは本来、アブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルを、神が大いに富ませる、その財産を増やす、取り戻す(創世記 31:9) という意味の言葉であり、これもまた神のご計画に則したものであると言えます、これが「十字架」ハツレーヴが正確には三つの言葉によると述べた理由です。

② レーヴ

そして次にレーヴについて。これは「心」という意味でその最初の言及は以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

6:5 【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。

このように、レーヴとは本来、人が持つ「悪」の「心」を意味し、神に聞き従わず、自分勝手に生きる人を意味します。かつて神はこのような人々を地上からすべて消し去るための大洪水を起こされ、神に聞き従う心を持ったノアとその箱舟に入ったものたち以外のすべての人を滅ぼされました。ですからレーヴとは本来、神に滅ぼされる存在を指す言葉なのです。

というわけでハツアラーとこのレーヴの意味を組み合わせるとこうなります。「ユダヤ人を滅ぼそうとする悪から彼らを救い出し、その敵を滅ぼし、イスラエルを回復する」これが「十字架」ハツレーヴに秘められた神のご計画です。そしてイエシュアがこれを成される御方であることが「(イエシュアを)十字架につける。」とユダヤ人たちが叫んだというこの出来事には表されているのです。

私たち教会にとって「十字架」は罪の赦し、救いの象徴です。では罪が赦される、救われるとは何でしょう。具体的にどういう状況、状態を指すのでしょうか。残念ながら私たちの知る「十字架」からはそれを知ることができません。しかしヘブル語の「十字架」ハツレーヴからならばこのように、具体的にそれを知ることができるのです。

5. 時は近づいている

ユダヤ人、イスラエル、エルサレム神殿、そしてヘブル語。私たち日本人の日常からはこれらの存在、名称、言葉はやはり馴染みのうすい、どうしても遠く関わりのないものを感じてしまいがちです。しかしだからと言って、分からないからと言ってこれを無視したり、あるいは拒絶することは、聖書に記された神に対する理解をますます困難なものにしてしまい、聖書の真理を捻じ曲げて伝える悪魔、サタンにすきを与えることになり、ついには必ず起こるこれら神のご計画を否定するようなことになってしまいます。最後にもう一度言います。イエシュアはユダヤ人の王なのです。そして神はイスラエルをお選びになったのです。そしてこのイスラエルを通して、地上のすべての人々、つまり私たちを祝福するというご計画をお立てになったのです。これ以外に救いはなく、神はこの方法以外に人類を生かす方法を提示してはおられません。それが聖書に記された神の真実、事実、現実です。

創世記【新改訳 2017】

28:13 見よ、【主】が…こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

神はこのようにアブラハムの子孫であるイスラエルを、ユダヤ人とも呼ばれる彼ら一族をお選びになられたのです。かつては教会においてこの事実は軽視され、あるいは否定されてきました。しかし今日、神は私たちにこの事実に目を留めるよう、御言葉に隠された奥義を開いてくださっています。それはその成就の時近づいてきている証拠です。それはたとえるなら、遠くに見えた人影がだんだんこちらに近づいて来て、それが男性か女性か、どのような髪形、服装かが少しずつ見える、わかってくる、というようなものです。今まで抽象的で漠然としていた、救いや祝福、そして御国と言った聖書の御言葉が、その具体性をいよいよ見せ始めてきたのです。ですから時は近づいています。たとえあなたが信じようが信じまいが、泣こうがわめこうが、神は、イエシュアは現実の存在として必ず来られ、聖書に示された通りに事を行われるのです。皆さんはテレビやネットの天気予報を信じて明日の準備をされるでしょう。しかしその的中率は 60%程度です。しかし今私がお伝えしている聖書の預言は 100%です。信じられることを心からお勧めいたします。聖霊の助けがありますように。